

今回、私の参加目的は、現在私の研究のテーマである心臓 MRI について海外での研究の動向を知り、それについての講義を受けること、また、海外での放射線技師業務の現状に触れ、日本との違いについて把握することである。

この海外研修において一番よかったと思うことは、実際の海外の第一線の地であるスタンフォード大学において講義を受けることができたことである。特に心血管領域で著名な Francis Chan 先生の講義「Cardiac MR technical advances」を聴講できたことであり、その中でも 4D-flow visualization の心臓への適応についての項は非常に興味深いものであった。心臓のような血流の動態が複雑である部位に対して 3D の PC(phase contrast)法で全心時相を評価することによって、逆流時や心機能不全時の血流動態を細かく解析することが可能であるため、心臓領域において臨床的意義が高い技術であると考えられる。現在、評価は self-produce のソフトウェアで行なっているということで限定的な使用ということであるが、方法論として技術を取り入れ独自で解析を行なっていたものだとは強く感じた。

日本と海外での放射線技師を取り巻く環境が異なるということも十分実感できた。アメリカでは放射線技師が担当する業務が、取得しているライセンスに依存するということがその大きな違いを生み出す要因になっているということである。加えて、スタンフォードでは MR research technologist として研究専属で従事する者がおり、撮像シーケンスの開発や研究の目的に沿った撮像方法の探究などを専門に行なっているというところが日本と大きく異なる。日本では病院業務に従事する傍ら終業後に研究活動を行なうというのが一般的であるので、このような体制が羨ましいと思う反面、日常業務での経験を基に生まれる工夫点なども研究を行う上でよいヒントとなる場合があるので、必ずしも研究専属がよいということではないとも感じた。

病院での見学から感じたことは、検査枠などに十分な余裕があり比較的ゆったりとした間隔で検査を進めていることであり、この点においても日本と大きく異なる点である。もちろん、医療保険制度など社会背景が異なるのでその点は相違点があるところなのかもしれないと感じた。

スタンフォードという広大なしかも設備面においても充実した場所だからこそ生み出されるものがあるのかもしれないが、放射線技師としての個々の役割に大きな違いはないと感じた。今回の研修で海外の現状に触れることができたことはとても有益であり、ここで経験したことや講義を今後に活かし次の研究への手掛かりとしたい。

最後に、このような機会を与えてくださった日本放射線技術学会の関係者の皆様、ならびにスタンフォード大学にてお世話いただいた GE ヘルスケアジャパンの皆様に深く感謝申し上げます。また、参加を後押ししていただいた北海道大学大学院坂田元道准教授に改めて御礼を申し上げます。

Photo Lucas Center 講義室での1コマ、筆者(中央)

